

代で層化して無作為抽出した20-69歳の住民2,000名のうち、第1回調査に返信した736名に対して実施した第2回調査に回答があった496名(平均年齢46.6±14.1歳、男性46.8%)である。調査票は運動習慣の阻害要因に関する20項目で、5つの下位尺度(①身体的・心理的阻害、②時間の管理、③社会的支援の欠如、④怠惰性、⑤物理的環境)から構成されている。解析には、性、年代(20-39歳/40-59歳/60歳-)、学歴(12年未満/以上)、労働時間(40時間未満/以上)、BMI(25未満/以上)、身体活動度(3METs以上の強度の身体活動が週150分未満/以上)をグループ変数とし、独立サンプルのt検定および一元配置分散分析にて、阻害要因がどのように異なるのかを検討した。

【結果】 阻害要因の点数が高値を示したのは、身体的・心理的阻害要因の得点では男性( $p<.05$ )、BMI高群( $p<.01$ )、身体活動度低群( $p<.001$ )であった。時間の管理では若年群( $p<.001$ )、学歴高群( $p<.01$ )、労働時間長群( $p<.001$ )、身体活動度低群( $p<.01$ )で、また、怠惰性では若年群( $p<.001$ )、学歴高群( $p<.001$ )、身体活動度低群( $p<.001$ )で得点が高かった。その他の阻害要因得点も対象者の属性、社会的要因によって異なっていた。

【結論】 性、年代、学歴、労働時間等により運動の阻害要因の点数に差が認められ、どのような阻害要因を強く認知しているのかは社会的状況により異なることが明らかとなった。効果的な身体活動の推進を図るには、対象集団の特性を把握し阻害要因を考慮した戦略が必要と考えられる。

### P3-49.

#### 胎仔マウス皮膚を用いた毛包再構築法の確立とそれに及ぼす諸因子の解析

(大学院三年・皮膚科学)

○宮倉 崇

(皮膚科学)

山崎 正視、坪井 良治

毛器官は、胎児期に表皮と真皮との相互作用によって生じる小さな器官である。毛器官は時間の経過とともに、その形態を変え、再生、退行を繰り返す。Zhenらは生後2日のB6マウスの皮膚を使って毛包の再構築を行い、それらに毛周期を認めたと報告している。

今回、我々は彼らの方法を改変して毛包の再構築を行い、妊娠14日から18日までの胎仔マウスでも、毛器官が再構築されることを見出した。毛包構築に必要な細胞数の検討を行ったところ、一部あたり最低 $1 \times 10^5$ の細胞数と推定された。注入する細胞数の増加に応じて、発生する毛包数も増加した。採取したマウス皮膚をEDTAにて表皮と真皮成分に分離し、それぞれを別々に2日間培養した細胞では毛包の再構築が起こらなかった。このことは、毛包の構築には未分化な上皮系、間葉系の細胞の相互作用が必要であることを示唆している。さらにこの実験系にIV型コラーゲン、ラミニン5を添加して実験を行ったところ、IV型コラーゲンを添加した場合は、添加しない場合と比べて、発生した毛包数が有意に増加した。ラミニン5では、有意な増加は認めなかった。以上の結果から、基質蛋白であるIV型コラーゲンにより毛包の形態形成が促進されることが確認された。

### P3-50.

#### Rebamipide (ムコスタ®) の口腔粘膜組織内濃度に関する研究

(専攻生・口腔外科学)

○安田 卓史

(口腔外科学)

金子 忠良、里見 貴史、松尾 朗

千葉 博茂

(薬剤部)

宮松 洋信

【目的】 Rebamipide (ムコスタ®) は国内で開発された胃炎・胃潰瘍治療剤で、口腔内アフタ性潰瘍や放射線治療による口内炎に対する有効性が徐々に明らかになりつつある。われわれは頭頸部癌患者に対する化学・放射線療法時の口腔粘膜炎への対策として、rebamipideを粉砕し含嗽剤(REB含嗽剤)として調整したものを使用している。

今回、われわれは基礎的研究として同薬剤の口腔粘膜組織内濃度の測定が必要であると考え、rebamipideの内服時やREB含嗽時の口腔粘膜組織内濃度を測定し比較することによって、両者の口腔粘膜への分布を経時的に検討した。なお、本検討は本学倫理委員会の承認を受けている。

【対象および方法】 健常成人男性ボランティア4名

に対し、rebamipideの内服後に口唇、頬粘膜中央部、歯肉頬移行部の計3か所から粘膜を微量採取し、最も高い濃度を示す部位を本研究の対象部位とした。つぎに、健常成人男性ボランティア10名を内服群と含嗽群の2群にわけ、選定した部位の粘膜を経時的に採取し濃度を測定した。測定法はLC/MS法をもちいた。【結果】 さきに測定した3か所の粘膜において、歯肉頬移行部が最も高濃度を示し、経時的測定時の採取部位とした。また、rebamipide内服2時間後の平均濃度は $0.024\mu\text{M/L}$ であった。経時的測定における組織内濃度は含嗽群が内服群に比し明らかに高値であり、内服時の口腔粘膜組織内濃度は胃粘膜に比べ低値を示した。含嗽時は最も高い10分値において $6\mu\text{M/L}$ であった。以上の結果より化学・放射線療法時の粘膜炎への対策としてのrebamipideの使用法は含嗽剤としての使用が適しており、含嗽後10分以内のより早期に活性酸素除去効果を示していることが推測された。

### P3-51.

#### 八王子医療センターのICTラウンドについて

(八王子・総合診療部)

○内海 健太

(八王子・看護部)

山田 陽子

(八王子・検査科)

那須 豊

(八王子・薬剤部)

松永 宣史

(微生物学)

小池 直人

八王子医療センターでは院内感染対策のために感

染症対策委員会のもと感染対策チーム (ICT) を設けて活動してきた。ICTでは平成19年4月から病棟ラウンドを開始した。その方法の推移と結果について報告する。

【方法】 病棟ラウンドはICTメンバーのうち、医師、看護師、検査技師、薬剤師、そして外部委員の微生物学講座からなるチームを構成し定期的に行った。

【対象と結果】 当初(4月、5月)は薬剤耐性菌が出現する前の状況を把握するために、特定の抗菌薬(代表的なカルバペナム系1剤および抗メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)薬1剤を選択)が投与されている臨床的状況(疾患、病状、デバイス、検出されている微生物など)を調査した。その結果、抗菌薬使用前に原因微生物の同定の検査が行われていないこと(54例中14例、26%)、臨床的状況(発熱、MRSA感染症疑いなど)により投与されていること(54例中24例、44%)、が判明した。

次に(6月、7月)、薬剤耐性菌(MRSA、多剤耐性緑膿菌)を検出している患者を調査した。その結果、共通する臨床的状況として、複数の広域スペクトラム抗菌薬の使用歴と、院外からの持ち込みの可能性が高いことが判明した。

現在(8月以降)は、カルバペナム系抗菌薬の適正使用を行う準備段階として、同抗菌薬(院内採用は5剤型)を投与されている患者の臨床的状況を調査している。

【結語】 抗菌薬と耐性菌の両面から臨床的状況を調査し、抗菌薬投与前の原因微生物の検索の不徹底や盲目的な広域抗菌薬の使用が認められた。今後、院内感染症対策の一環をになうために適切な検体検査法や抗菌薬の使用法の教育啓蒙およびICTによる感染症診療への介入などが必要と思われた。